

2009年スマトラ沖地震（パダン地震）緊急現地調査報告

アジア防災センター主任研究員の茨木徹雄と荒木田勝、人と防災未来センター永松伸吾研究副主幹が10月5日から7日(出張期間10/4-8)にインドネシアの西スマトラ州都パダン市と周辺地域を調査しました。

調査の目的は9月30日に発生した地震による被害状況把握と、インドネシア政府・州・地方自治体や関連機関の活動状況把握です。

10月5日に調査団は現地災害対策本部があるパダン市内の西スマトラ州知事公舎へ向かいました。パダン国際空港から市内へ向かう途中でいくつもの中高層ビルが被害を受けているのが確認されました。一方で平屋はほとんど被害を受けていないように見えました。

知事公舎では多くの国際機関やNGOが詰めかけ、災害対策状況が更新され、調整が行われていました。毎晩ドナー国はコーディネーター会議を開催していましたし、衛星通信システムでTV会議やインターネットが利用可能となっていました。

インドネシア政府による被害状況は以下の通りです。

死者約700名、負傷者約2,200名、大破建物約99,000棟



Collapsed Multi-Story Buildings



Governor's House

二日目は地元の Andalas 大学へ行き、被害状況を聞くと共に中央政府から大学が依頼された住居被災度判定調査について情報を得ました。その後パダンパリアマン県の災害対策本部を訪問し県職員の案内で学校被害を視察しました。学校の多くは無柱か本数が少なく、レンガ壁は十分なセメントが使われておらず低品質で耐震性がありませんでした。



Hearing in University



Damaged School



Brick Wall

三日目には 100 名以上が亡くなった地すべり箇所を訪問しました。村人によると地震の直後に地滑りが発生したが、既に暗くなっていたため避難は翌日になったとのこと。地滑りの直接の原因は地震ですがそれ以前に降り続いていた雨の影響があったと考えられます。



Landslide Area



School before Earthquake

三日間の現地調査結果として三点を挙げます。

- 1) パダン市では中高層の鉄筋コンクリート造が多く被害を受けた。
- 2) パリアマン市とパダンパリアマン県ではレンガ造の平屋が多く被害を受けた。
- 3) 死者のうち半数程度は山間部の地すべりが原因となった。